

日本語教育の多目的化およびモジュール化

—2004年度留学生センター日本語プログラムの再編報告—

加納 千恵子

要 旨

昨年来、多様化する外国人留学生の日本語学習ニーズに応えるべく、留学生センターで開講している日本語コースのあり方を再検討してきたが、2004年4月から、以下の4つの方針によりカリキュラムの再編を行った。(1)初級に関しては、各コースをサイズダウンすることによりコース数を増やし、授業を取りやすくする、(2)日本語や日本文化に興味のある学習者向けの「一般日本語コース」と、研究などに必要な日本語を学ぶ「アカデミック日本語コース」とを分ける、(3)中・上級に関しては、それぞれ技能別、目的別にクラスを開講するが、原則として受講者が5名以上集まらない学期は実施しない、(4)集中コース、半集中コース、および補講コースのそれぞれを、学生がニーズに合わせて組み合わせる受講できるようにモジュール化する。本稿では、このような日本語コースにおけるカリキュラム再編の試みについて報告を行う。

【キーワード】 日本語学習ニーズ カリキュラムの再編 技能別 目的別
一般日本語 アカデミック日本語 モジュール化

Japanese Language Teaching with Multi-Purpose and Modular Structure: report on the reorganization of the Japanese program at ISC in 2004

KANO Chieko

【Abstract】 For the past year we have been reexamining the Japanese Language Programs at the International Student Center in order to meet the needs of different types of foreign students. As a result, we reorganized the curricula according to the following four policies in April, 2004. (1)increasing the number of beginners' level courses by having smaller classes, (2)dividing the courses into two streams; "Standard Japanese courses" for those who are interested in Japanese language and culture and "Academic Japanese courses" for those who are eager to learn Japanese for academic purposes, (3)providing as many classes as possible for different skills and purposes but conducted only when more than 5 students register, (4)organizing the courses into a modular structure so that each student can choose different courses and classes depending on his/her purpose, level and convenience. In this paper, the auther reports on the reorganization of the Japanese language courses in 2004.

1. はじめに

筑波大学における日本語教育の歴史に関しては、1973（昭和 48）年の大学創設以降、1976（昭和 51）年度に日本語教育プログラムが開始されてから 1985（昭和 60）年度までの十年間について、本センターの論集第 1 号に堀口（1986）が報告している。開始当初は、中級レベルの補講コース（週 3 コマ）しかなかったが、少しずつコースの数が増え、1980（昭和 55）年度には本学の教育研究科が受け入れている教員研修プログラムの学生を対象とした初級プログラムも始まった。1984（昭和 59）年 4 月には本センターの前身である「留学生教育センター」が設立され、国費留学生の予備教育のための集中コースが始まったことが、日本語教育プログラムにとって大きな転機となった。

その後 1991（平成 3）年には、「留学生教育センター」から「留学生センター」に組織が変更され、いくつかのコース再編やカリキュラム変更などを経て現在に至っている。今年、筑波大学に「留学生教育センター」ができて 20 年目に当たり、「留学生センター」となってからも 10 年余が経過したことになる。また、2004 年 4 月には大学の法人化という大きな節目を迎えたことから、本センターの日本語教育等担当部門では、その前年から多様化する外国人留学生の日本語学習ニーズに応えるべく、留学生センターで開講している日本語コースのあり方を再検討してきた。その結果、2004 年度から、日本語コース・カリキュラムの大幅な再編を行うこととなった。

本稿では、本センターにおける日本語コース・カリキュラム再編の背景、問題、新しいコース・カリキュラムの概要などを紹介しつつ、今回の再編の大きな方針となった日本語教育プログラムの多目的化およびモジュール化について報告する。

2. 日本語コース・カリキュラム再編の背景

堀口（1986）によれば、1984（昭和 59）年に留学生教育センターが設立された当時、大学に在籍した留学生数は 406 名で、専任 4 名と非常勤 8 名の体制で以下のような日本語コースが開講されていた。

表 1 1984(昭和 59)年度留学生教育センターの日本語コース概要

コース名	レベル	コマ数	対象	主教材・内容	開講時期
A コース	初級	週2コマ×20週	予備教育生	『日本語の基礎』I&II	10月～3月/4月～9月
T コース	初級前/後期	週8コマ×15週	教員研修生	『日本語の基礎』I/II	10月～2月/4月～7月
B コース	初級後期	週10コマ×15週	研究留学生	『日本語の基礎』II/『IMJ』	10月～2月/4月～7月
C コース	中級前期	週10コマ×15週	研究留学生	『日本語表現文型』I	10月～2月/4月～7月
D コース	中級後期	週10コマ×15週	研究留学生	『日本語表現文型』II	10月～2月/4月～7月

(注)堀口(1986)の日本語科目表には上級 (E, F) コースの記載があるが、これは大学院地域研究研究科の開設科目であるため、本表からは省いた。

当時、センターの日本語教育の主な対象と考えられていたのは、文部省の国費研究留学生、筑波大学の教育研究科で受け入れる教員研修留学生、および大学院に進学予定の私費研究留学生の3種類であった。国費留学生に対しては、ゼロから日本語を教える半年間の初級集中日本語コースが予備教育として用意され、また教員研修留学生のためには、教育関係の専門科目を取りながら1年間にわたって半集中的に初級日本語が学べるコースができていたが、筑波大学で私費の研究留学生を受け入れる際には、研究に必要な日本語力を備えていることが要件となっていたため、補講コースにおいては建て前として初級レベルは必要ないと考えられていた。しかし、初級レベルの研究留学生も実際には数多く受け入れられていたため、教員研修用のTコース（初級前・後期）を一般にも開放したり、「初中級」のCコースの中味を限りなく初級に近づけたりすることでしのいできた。

その後、予算等の関係で週10コマ開講していたコースが週7コマに縮小されたり、コース名の微調整などが行われたりしながら、このような体制がしばらく続くこととなったが、一般の研究留学生のための初級コースがないという問題は、この後も長く尾を引くこととなった。

2. 1 「技能別」クラスと「専門日本語」クラスの取り組み

1991（平成3）年度に、「留学生教育センター」から「留学生センター」に名称が変更され、組織も整えられたことから、センターにおける日本語教育プログラムもより現実に適した形に調整することになり、中・上級レベルにおいては、技能別クラスを設けて、受講者のニーズにより細かく対応できるようにする取り組みが定着した。

1992（平成4）年の留学生センターのパンフレットによれば、同年5月に筑波大学に在籍した留学生数は839名で、約10年の間にほぼ倍増したことがわかる。当時は以下のような日本語コースが開講されていた。

表2 1992（平成4）年度留学生センターの日本語コース概要

コース名	レベル	コマ数	対象	主教材・内容	開講時期
日本語予備教育	初級	週20コマ×20週	予備教育生	『S F J』vol.1～vol.3	10月～3月／4月～9月
教員研修	初級前/後期	週7コマ×15週	教員研修生	『S F J』vol.1～vol.2	10月～2月／4月～7月
中級入門	初中級	週7コマ×15週	研究留学生	『総合日本語初級から中級へ』	10月～2月／4月～7月
中級I	中級前期	週8コマ×15週	研究留学生	文型・文法3コマ+技能別5コマ	10月～2月／4月～7月
中級II	中級中期	週8コマ×15週	研究留学生	文型・文法3コマ+技能別5コマ	10月～2月／4月～7月
上級	中級後期	週6コマ×15週	研究留学生	文型・文法1コマ+技能別5コマ	10月～2月／4月～7月
技能別	中級前期	各週1コマ×15週	研究留学生	会話1,聴解1,読解1,作文1,漢字1	10月～2月／4月～7月
	中級中期	各週1コマ×15週	研究留学生	会話2,聴解2,読解2,作文2,漢字2	10月～2月／4月～7月
	中級後期	各週1コマ×15週	研究留学生	会話3,聴解3,読解3,作文3,漢字3	10月～2月／4月～7月
専門日本語	レベル指定なし	週4コマ×15週	研究留学生	科学2コマ,工学1コマ,経済社会コマ	10月～2月／4月～7月

（注）初級および初中級より上のレベルの留学生は、プレースメントテストの結果、自分のレベルの「文型・文法」クラス（必修科目）に配置されるが、技能別クラスは選択して受講できる。「読解2」には「読解2A」「読解2B」、「読解3」には「読解3A」「読解3B」がそれぞれ開講された。

当時、他大学にはあまり見られなかった日本語コース・カリキュラムの特徴的取り組みとして、「技能別」クラスと、「専門日本語」クラスとが挙げられる。日本語補講の受講を希望する研究留学生は、プレースメントテストによって適正なレベルに配置され、そのレベルの「文型・文法」クラス（3コマ）が必修となるが、その他の5技能「会話、聴解、読解、作文、漢字」のクラスについては、選択して受講することができる。これは、漢字圏留学生の場合、漢字知識に助けられて読み書きのレベルは高くても、文法力や会話力、聴解力が弱い学生も多いこと、一方、非漢字圏留学生の中には、文法知識や会話や聞き取りのレベルは高くても、漢字を知らないために読み書きができないという学生が多いこと、などによる。この「技能別」クラスの取り組みは、一定の成果を収め、その後長く当センターの伝統的取り組みとなる。

一方、日本語補講を受講する留学生の専門分野は理工系と人文系に大きく分かれ、使われる語彙や文献なども異なることから、「読解2」「読解3」のクラスにそれぞれ「A（文系）」と「B（理工系）」を設けたことも当時の特色であった。しかし実際には、受験準備のために日本語のレベルアップを図りたいという留学生たちは両方の読解クラスを取ってしまうことが多く、その結果、各読解クラス集まる受講生たちの専門分野が多岐にわたってしまい、教材の選択や調整にかなり苦労しなければならなかった。

さらに専門分野における日本語への対応策として、留学生担当教員を中心に「専門日本語」クラスも開講されたが、実際には、集まる受講生の日本語レベルの差が大きすぎ、対応にかなりの困難があったようである。

結局、この時期の日本語コース・プログラムにおいて行われた「技能別」クラス、「専門日本語」クラスという特色ある取り組みについては、「技能別」の方だけが機能し、専門日本語教育の方は、それほど目覚ましい成果を上げるには至らなかったと言える。これは、対象となる留学生数が多すぎ、専門分野もレベルも多岐にわたりすぎていたために効果的なクラス分けができなかったこと、および各分野において必要となる専門日本語の中味（使用頻度の高い語彙、表現、文型、談話構造など）の抽出・検討や教材整備などが当時はまだ十分できなかったことなどによるものと考えられる。

2.2 短期交換留学生の受け入れによる改編

文部省による短期留学の推進に伴い、1994（平成6）年度から始まった日本国際教育協会（AIEJ）の奨学金による「短期交換留学生受け入れ支援制度」は、1995（平成7）年度にはその規模を拡大して「短期交換留学推進制度」となり、数多くの学部学生を中心とした短期留学生の国立大学への受け入れを可能にすることとなった。国立大学における短期留学生受け入れの開始時期は、以下のものであった。

1994 年秋～九州大学で受け入れ開始

1995 年秋～東京大学・筑波大学で受け入れ開始

1996年秋～東北大学・千葉大学・名古屋大学・大阪大学・広島大学で受け入れ筑波大学における短期留学生の受け入れ方式は、九州大学や東京大学などのように短期留学生のための英語による日本文化紹介などの特別プログラムを用意して受け入れる「特別プログラム方式」とは異なり、既存の英語によるコースや講義、日本語クラスを利用して受け入れるという「分散受け入れ方式」⁽¹⁾であった。そこで、一般の研究留学生用に初級コースがなかったという経緯から、短期留学生のために初級コースを増やすという措置が取られた。

1995（平成7）年9月に、最初の受け入れによる短期留学生66名が来日した。同年12月に筑波大学医療・厚生担当副学長、工藤典雄らによって上記の短期交換留学生を対象に行われた宿舍整備に関するアンケート及び聞き取り調査⁽²⁾によると、66名中回答した62名の学生全体の60%以上が「留学の中心は日本語学習である」と答え、専門の学習が中心であると答えたのはわずか15%にすぎないことがわかった。特にアメリカの学生では、9割近くが日本語学習を中心にしたいと答えていた。

この調査の結果から、大学側の当初の短期留学生のニーズに対する理解が不十分であったことが図らずも明らかになったわけであるが、同時に、半数近くの学生から、日本語科目の履修に関して、既存のプログラムに分散して受け入れる方式であるために起こった不都合に対して、次のような不満の声が聞かれた。

- (1) 筑波大学の留学生センターにおける日本語教育プログラムは、主に研究留学生を対象に行われており、文部省の国費研究留学生の受け入れ時期が4月と10月の2期であるため、2学期制をとっている。しかし、学類、研究科では3学期制をとっているため、授業時期や休業時期にずれがある。
- (2) 留学生センターの日本語の授業は、語学の授業としてはクラス人数が多すぎ、不適正である。（もともと単位取得を目的としない補講であるため、1クラス平均20～30人であったが、急激に増えた短期交換留学生の受け入れにより、1クラス40人以上となったクラスもあったことによる。）
- (3) 受け入れ学類や研究科のプログラムと留学生センターのプログラムとの間の調整が不足していたことから、ある学類から提供されている科目で特に短期留学生を対象としたものの中には、異文化理解を目的に歌舞伎見学など一日かけて外へ出かけていくプログラムがあったり、集中講義をして、その授業をとっている学生はその間、他の授業を休まなければならないなどという不都合があった。また上記(1)のような事情や科目履修の方法、手続き等に関して、来日直後に適切なオリエンテーションがなかった。

上記の(3)のような問題に対処するため、留学生センターに「短期交流部門」が設置され、短期交流プログラムで来日する留学生のための受け入れ業務全般、オリエンテーション、履修科目等に関する調整、相談などを担当することとなって、事態は一応改善された。しかし、(2)の問題は、依然として予算措置との関係で、いまだに解決されているとは言い難い。センター

で開講される日本語科目が単位の取得が可能な正規の科目にならない限り、解決の難しい問題であろう。

(1)の問題に対処するため、1997(平成9)年度から、留学生センターの日本語コースは、国費留学生のための予備教育を除いて、すべて3学期制に移行することとなった。そして、短期留学生のための初級コースは、150時間程度の日本語学習歴を前提とする、週6コマの初級コースとして整備され、名称も「初級150」(翌年度からは「日本語150」とされた。また、短期留学生の中には、日本語・日本文化学類が受け入れている、日本語や日本文化専攻の比較的レベルの高い学部学生もいることから、「技能別」クラスをもう1レベル増やし、「レベルI」～「レベルIV」とした。

1997(平成9)年5月に筑波大学に在籍した留学生総数は927名に上り、留学生センターにおいて表3のような日本語コースが開講された。

表3 1997(平成9)年度留学生センターの日本語コース概要

コース名	レベル	コマ数	対象	主教材・内容	開講時期
日本語予備教育	初級	週20コマ×20週	予備教育生	『SFJ』vol.1～vol.3	4月～9月/10月～3月
教員研修	初級	週7コマ×10週	教員研修生	『SFJ』vol.1～vol.2	4月～6月/9月～11月/12月～2月
初級150	初級前期	週6コマ×10週	短期留学生	『SFJ』vol.1～2	4月～6月/9月～11月/12月～2月
中級入門	初級後期	週8コマ×10週	研究留学生	『SFJ』vol.2～3	4月～6月/9月～11月/12月～2月
技能別レベルI	中級前期	週8コマ×10週	研究留学生	文型・文法3コマ+技能別8コマ	4月～6月/9月～11月/12月～2月
レベルII	中級中期	週8コマ×10週	研究留学生	文型・文法3コマ+技能別5コマ	4月～6月/9月～11月/12月～2月
レベルIII	中級後期	週8コマ×10週	研究留学生	文型・文法3コマ+技能別5コマ	4月～6月/9月～11月/12月～2月
レベルIV	中上級	週8コマ×10週	研究留学生	文型・文法3コマ+技能別5コマ	4月～6月/9月～11月/12月～2月
専門日本語	レベル指定なし	週3コマ×10週	研究留学生	科学用語2コマ, 工学1コマ	4月～6月/9月～11月/12月～2月

(注)補講技能別クラスのレベルIでは、「会話1」を「会話1-1」と「会話1-2」、「作文1」を「作文1-1」と「作文1-2」、「漢字1」を「漢字1-1」と「漢字1-2」に分け、またレベルIVでは、「文型4」を「文型4-1(2コマ)」と「文型4-2(1コマ)」に分けることにより、クラスのサイズダウンを図った。

この改編により、初級レベルの日本語教育は細分化され、きめ細かくなったが、上級レベルの方は、「聴解」と「会話」を合わせて「聴解会話」クラス、「読解」と「作文」を合わせて「読解作文」クラスとするなど、予算縮小のための措置も取られた。

2. 3 アカデミックな目的のための日本語教育ニーズ

本センターの論集第19号に許・他(2004)が報告しているように、2001(平成13)年から日韓理工系学部留学生のための大学入学前予備教育が始まったことにより、さらに日本語教育を必要とする留学生の種類が増えることとなり、新たな問題が出てきた。

まず、日韓理工系学部留学生予備教育のために来日する韓国人学生たちは、短期留学生たちより若く、大学院受験を目指す研究留学生たちとはさらに年齢が大きく離れており、年齢差による興味・関心の違いや知識の差などによって、教材の選択、会話のトピックや作文のテーマの選定等に関して、新たな検討が必要となってきた。

一方、10か月から1年しか日本に滞在しない短期留学生と比べると、日韓理工系学部予備教育生は、4年間大学で勉強して卒業することが大きな目的であることから、理工系の専門分野における日本語を学習する動機も必要性も高いと言える。短期留学生の場合は、主に日本語の会話力や聞き取り能力の向上を目指し、日本の文化(伝統文化ばかりでなく、テレビ・音楽・アニメ・若者の風俗など現代文化も)について知りたいという希望が多いのに対して、日韓理工系学部予備教育生の場合には、とにかく学部の授業についていけるだけのアカデミックな日本語能力⁽³⁾がまず、必要とされている。

これは、大学院入試を控えて受験勉強的な日本語教育を望む研究留学生と、一部は共通するが、異なることも大きい。研究留学生の場合は、専門分野によって必要とされる日本語能力にかなり差があり、人文社会系の場合はかなり高い日本語能力が要求されるが、医学や理工系では専門は英語で十分とする研究科もある。また、大学院入試に日本語科目を課していない研究科もあり、日常生活に必要な日本語力でよいとする考え方もあるのに対して、学部に入る留学生の場合は、教養科目や外国語科目も卒業要件になっていることから、日本語力ばかりでなく一般常識や基礎学力、外国語としての英語力まで要求されることになるのである。

以上のような留学生の年齢、身分、日本語のレベル、学習目的・ニーズなどの多様化に対処するため、本センターの日本語コース・プログラムは、さらなるカリキュラムの改編を迫られることとなった。

3. 2004年度のコース・カリキュラム再編

前節で報告したような経緯により、本センターの日本語プログラムのコース・カリキュラムは数々の変遷を重ねてきた。特に近年の変化の主な要因としては、3つ考えられる。一つは、初級レベルの短期留学生が急増していること、もう一つは、日本語・日本文化学類との協定による中上級の短期留学生、従来からいる日本語・日本文化研修生のようなかなり日本語レベルの高い学部留学生も増え、日本語レベルの両極化が進んでいることである。さらに3つ目は、日韓理工系学部予備教育生の受け入れによる新たなニーズの誕生である。

その一方で、依然として日本語での大学院受験を目指す研究留学生もおり、アカデミックな

学習目的による短期促成的な日本語教育の必要性も大きくなっている。また大学院の入試には日本語が課せられず、研究生の時にはそれほど日本語を必要としなかった留学生が、大学院の正規生になってから研究のための日本語の必要性に気づくケースも増えてきている。

このような多様なニーズに応えつつ、しかも法人化とともに各部局で予算削減への要求が高まる中で、2004（平成16）年度には以下の4つの方針によって本センターの日本語コース・カリキュラムの再編が行われることとなった。

- (1) 初級に関しては、各コースをさらにサイズダウンすることによりコース数を増やし、各学生が自分のスケジュールに合わせて受講しやすくする。
- (2) 日本語や日本文化に興味のある学習者向けの「一般日本語コース」と、勉学・研究などに必要な日本語を学ぶ「アカデミック日本語コース」とを分ける。
- (3) 中級・上級に関しては、それぞれ技能別、目的別にできるだけ多くのクラスを開設するが、受講者が5名以上集まらない学期は実施しないこととする。
- (4) 集中コース、半集中コースおよび補講コースの学生がそれぞれのニーズに合わせて組み合わせることで受講できるように、コース・クラスのモジュール化を図る

3.1 コース・クラスのモジュール化

1980年代ごろから欧米諸国で進められてきた大学等のカリキュラムのモジュール化は、従来のような長く柔軟性に欠けるタイプのコースを解体し、より短いモジュールに組み替えたものである。こうしたモジュールは、それ自体独立の学習ユニットであるが、

- (1)簡潔である
- (2)組み合わせ、相互乗り入れの自由度が高い
- (3)独立して、あるいは連続して評価の対象となり得る

という3つの特性を持ち、個々の学習者のニーズや学習スピードにも柔軟に適應できるという大きな利点があることが知られている。

そこで、本センターの日本語コースにおいても、従来の「予備教育コース」「補講コース」「短期留学生用コース」「日韓理工系学部留学生用コース」といった分け方をやめ、コース時間数、開始時期、目的などによるコース設定をい、各コースの週コマ数を少なくして、コース同士を自由に組み合わせられるようにモジュール化することとした。

以下にその概要を示す。

表 5 2004(平成 16)年度留学生センターの日本語コース概要

	コース名	レベル	コマ数	対 象	主教材・内容	開 講 時 期
日 本 語 集 中 コ ー ス	春季コース	初級前期	週 20 コマ×11 週	予備教育生	『S F J』 vol.1~vol.2	4月~6月
	夏季コース	初級後期	週 20 コマ×4 週	予備教育生	『S F J』 vol.3	7月
	秋季コース	初級前期	週 20 コマ×8 週	予備教育生	『S F J』 vol.1~vol.2	10月~12月
	冬季コース	初級後期	週 20 コマ×7 週	予備教育生	『S F J』 vol.2・vol.3	1月~2月
日 本 語 半 集 中 コ ー ス	春季コース	初級後期	週 10 コマ×11 週	予備教育生	『S F J』 vol.2~vol.3	4月~6月
	夏季コース	中級前期	週 10 コマ×4 週	予備教育生	中級教材	7月
	秋季コース	初級後期	週 10 コマ×8 週	予備/日韓/日研	『S F J』 vol.2~vol.3	10月~12月
	冬季コース	中 級	週 10 コマ×7 週	予備/日韓/日研	中級教材	1月~2月
一 般 日 本 語 コ ー ス S J コ ー ス	SJ1-1	ゼロ初級	週 4 コマ×10 週		『S F J』 vol.1(L1-4)	4月~6月/9月~11月/ 12月~2月
	SJ1-2	初級前期	週 4 コマ×10 週		『S F J』 vol.1(L5-8)	''
	SJ2-1	初級中期	週 4 コマ×10 週		『S F J』 vol.2(L9-12)	''
	SJ2-2	初級中期	週 4 コマ×10 週	短期留学生	『S F J』 vol.2(L13-16)	''
	SJ3-1	初級後期	週 4 コマ×10 週		『S F J』 vol.3(L17-20)	''
	SJ3-2	初級後期	週 4 コマ×10 週	および	『S F J』 vol.3(L21-24)	''
	SJ4-1	中級前期	週 2 コマ×10 週		中級教材	''
	SJ4-2	中級前期	週 2 コマ×10 週		中級教材	''
	SJ4-3	中級中期	週 2 コマ×10 週		中級教材	''
選 択 漢 字 ク ラ ス	K1-1	漢字 0~150 字	週 1 コマ×10 週	研究留学生	『BKB』 vol. 1 (L 1 - 15)	''
	K1-2	150~250 字	週 1 コマ×10 週		『BKB』 vol. 1 (L 11 - 22)	''
	K2-1	250~350 字	週 1 コマ×10 週		『BKB』 vol. 2 (L 23 - 35)	''
	K2-2	350~500 字	週 1 コマ×10 週		『BKB』 vol. 2 (L 31 - 45)	''
	K3-1	500~650 字	週 1 コマ×10 週		『BKB』 vol. 1 (L 1 - 4)	''
	K3-2	650~800 字	週 1 コマ×10 週		『BKB』 vol. 1 (L 4 - 7)	''
	K3-3	800~1000 字	週 1 コマ×10 週		『BKB』 vol. 1 (L 7 - 10)	''
目 的 別・ 技 能 別 ク ラ ス	レベル 4	中級中期	各週 1 コマ×10 週	短期留学生	※約 18 科目 (表 7 を参照)	''
	レベル 5	中級後期	各週 1 コマ×10 週	および	※約 25 科目 (表 7 を参照)	''
	レベル 6	中上級	各週 1 コマ×10 週	研究留学生	※約 13 科目 (表 7 を参照)	''

* 『SFJ』は、筑波ランゲージグループ編『Situational Functional Japanese』(凡人社)

** 『BKB』は、『Basic Kanji Book 基本漢字 500』(凡人社)

*** 『IKB』は、『Intermediate Kanji Book 漢字 1000PLUS』(凡人社)

具体的には、従来の予備教育コースを「集中コース(Intensive)」と「半集中コース(Semi-Intensive)」に分け、4月と10月の国費留学生の来日時期を活かしながらも、3学期制の補講と相互乗り入れが可能になるように、開講時期を春学期(4月～6月末)、夏学期(7月のみ)、秋学期(10月～11月末)、冬学期(1月～3月)とした。近年は国費留学生でも、来日後1年以内に進学先が決まらなると奨学金の延長ができなくなるなどの事情で、入試対策の緊急度が増し、従来のような長期の集中コース(18週連続)にはついてこれられない者も出てきているため、コースの長さも最長15週間とし、必要に応じて補講コースに転出して専門の研究準備をしながら日本語の学習を続けられるようなシステムを考えた。

補講に関しては、初級レベルの各コースの週当たりのコマ数を7コマから4コマとサイズダウンしたこと、中・上級レベルにおいて週1コマの目的別・技能別クラスを数多く開設したこと、受講科目が1つでも登録できることとし、それまで必修とされていた文法科目を選択科目としたことなどが具体策である。コース全体の日程が互いにどのような関係になっているか、次頁の表6を参照されたい。

例えば、4月来日の国費留学生が8月末の大学院入試を受験する場合、従来の18週の予備教育では、受験前の2か月くらいの間は日本語学習に身が入らない学生も多かったが、今回のモジュール化によるコース期間短縮により、春季集中コース(4月～6月末の11週間)の日本語予備教育修了後、2か月の夏季休暇中は受験準備に集中できるようになった。そして、受験後は、9月から補講コースの2学期に申し込んで、日本語学習を続けることができる。翌年2月の入試を受験する場合には、春季集中コース終了後すぐ夏季集中コース(7月の4週間)を続けて受けることもできる。また、その学生が日本語既習者の場合には、集中コースでなく半集中コースを選べば、午前または午後に研究室に通いながら日本語学習をすることもでき、予備教育期間中に専門の研究準備と日本語学習の両立を図ることが可能になった。

10月来日の国費留学生が2月の大学院入試を受験する場合も、秋季集中コース(10月～11月末の8週)の日本語予備教育修了後、2月まで受験準備に専念することができる。10月期に来日する国費留学生のうち、教員研修留学生は受験の必要がないため、秋季コース修了後、続けて冬季コースを履修することができる。また、日韓理工系学部留学生の場合は、併行して受け入れ学類における専門科目を聴講したり、専門日本語の手当てを受けたりする必要もあるため、日本語既習度が高ければ半集中コースを選ぶことができる。10月来日の日本語・日本文化研修生の場合、従来の補講コースでは、12月の3学期の開始を待たなければならなかったが、今回のモジュール化により、10月からの半集中コースに入るという選択肢もできた。

今後は、一般の研究留学生であっても、外国人研究員や教員であっても、授業料徴収などの問題が解決されれば、必要に応じて集中・半集中コースに入ることができるという道も考えられよう。日本語コース・プログラムのモジュール化によって、日本語学習の機会がさらに広がる可能性がある。

表 6 2004（平成 16）年度留学生センターの日本語コース全体の日程

4月	4月12日 春季集中コース開始	<table border="1"> <tr> <th colspan="4">Orientation & Warming-up</th> </tr> <tr> <td>春季 集中A (研修室A)</td> <td>春季 集中B (研修室B)</td> <td>春季 半集中C (研修室C) 午前</td> <td>春季 半集中D (研修室D) 午後</td> </tr> </table>	Orientation & Warming-up				春季 集中A (研修室A)	春季 集中B (研修室B)	春季 半集中C (研修室C) 午前	春季 半集中D (研修室D) 午後	4月7日-12日受付、13日1学期用PT、16日Orientation	<table border="1"> <tr> <th>1学期</th> <th>1学期</th> </tr> <tr> <td>SJコース</td> <td>JSPコース</td> </tr> <tr> <td>週4コマ×10週 (研修室G/H/I/J)</td> <td>週1コマ×10週 (研修室G/H/I/J)</td> </tr> </table>	1学期	1学期	SJコース	JSPコース	週4コマ×10週 (研修室G/H/I/J)	週1コマ×10週 (研修室G/H/I/J)				
Orientation & Warming-up																						
春季 集中A (研修室A)	春季 集中B (研修室B)		春季 半集中C (研修室C) 午前	春季 半集中D (研修室D) 午後																		
1学期	1学期																					
SJコース	JSPコース																					
週4コマ×10週 (研修室G/H/I/J)	週1コマ×10週 (研修室G/H/I/J)																					
5月	集中=週20コマ×11週 半集中=週10コマ×11週		4月19日一般コース1学期開始																			
6月	6月30日 春季集中コース終了		6月30日一般コース1学期終了																			
7月	7月5日 夏季集中コース開始	<table border="1"> <tr> <td>夏季 集中A (研修室A)</td> <td>夏季 半集中C 午前(研修室C)</td> <td>夏季 半集中D 午後(研修室D)</td> </tr> </table>	夏季 集中A (研修室A)	夏季 半集中C 午前(研修室C)	夏季 半集中D 午後(研修室D)																	
夏季 集中A (研修室A)	夏季 半集中C 午前(研修室C)		夏季 半集中D 午後(研修室D)																			
	集中=週20コマ×4週 半集中=週10コマ×4週																					
	7月30日 夏季集中コース終了																					
8月	} 休 み(8月末~9月初 大学院入試)																					
9月																						
			8月31日-9月3日受付、9月6日PT、10日Orientation																			
10月	10月12日 秋季集中コース開始	<table border="1"> <tr> <th colspan="4">Orientation & Warming-up</th> </tr> <tr> <td>秋季 集中A (研修室A)</td> <td>秋季 集中B (研修室B)</td> <td>秋季 半集中C 午前(研修室C)</td> <td>秋季 半集中D 午後(研修室D)</td> </tr> <tr> <td>(教員研修)</td> <td>(日韓)</td> <td>(日研生)</td> <td></td> </tr> </table>	Orientation & Warming-up				秋季 集中A (研修室A)	秋季 集中B (研修室B)	秋季 半集中C 午前(研修室C)	秋季 半集中D 午後(研修室D)	(教員研修)	(日韓)	(日研生)		9月13日一般コース2学期開始	<table border="1"> <tr> <th>2学期</th> <th>2学期</th> </tr> <tr> <td>SJコース</td> <td>JSPコース</td> </tr> <tr> <td>週4コマ×10週 (研修室G/H/I/J)</td> <td>週1コマ×10週 (研修室G/H/I/J)</td> </tr> </table>	2学期	2学期	SJコース	JSPコース	週4コマ×10週 (研修室G/H/I/J)	週1コマ×10週 (研修室G/H/I/J)
Orientation & Warming-up																						
秋季 集中A (研修室A)	秋季 集中B (研修室B)		秋季 半集中C 午前(研修室C)	秋季 半集中D 午後(研修室D)																		
(教員研修)	(日韓)	(日研生)																				
2学期	2学期																					
SJコース	JSPコース																					
週4コマ×10週 (研修室G/H/I/J)	週1コマ×10週 (研修室G/H/I/J)																					
11月			11月25日一般コース2学期終了																			
12月	12月10日 秋季集中コース終了																					
	12月11日から1月10日まで冬休み		11月29日-12月3日受付、12月6日PT、10日Orientation																			
1月	1月11日 冬季集中コース開始	<table border="1"> <tr> <td>冬季 集中A (研修室A)</td> <td>冬季 集中B (研修室A)</td> <td>冬季 半集中C 午前(研修室C)</td> <td>冬季 半集中D 午後(研修室D)</td> </tr> <tr> <td>(教員研修)</td> <td>(日韓)</td> <td>(日研生)</td> <td></td> </tr> </table>	冬季 集中A (研修室A)	冬季 集中B (研修室A)	冬季 半集中C 午前(研修室C)	冬季 半集中D 午後(研修室D)	(教員研修)	(日韓)	(日研生)		12月13日一般コース3学期開始	<table border="1"> <tr> <th>3学期</th> <th>3学期</th> </tr> <tr> <td>SJコース</td> <td>JSPコース</td> </tr> <tr> <td>週4コマ×10週 (研修室G/H/I/J)</td> <td>週1コマ×10週 (研修室G/H/I/J)</td> </tr> </table>	3学期	3学期	SJコース	JSPコース	週4コマ×10週 (研修室G/H/I/J)	週1コマ×10週 (研修室G/H/I/J)				
冬季 集中A (研修室A)	冬季 集中B (研修室A)		冬季 半集中C 午前(研修室C)	冬季 半集中D 午後(研修室D)																		
(教員研修)	(日韓)		(日研生)																			
3学期	3学期																					
SJコース	JSPコース																					
週4コマ×10週 (研修室G/H/I/J)	週1コマ×10週 (研修室G/H/I/J)																					
2月	(2月中旬初 大学院入試)																					
3月	2月28日 冬季集中コース終了		3月4日一般コース3学期終了																			

3. 2 コースの多目的化

補講コースの方は、大きく「一般日本語(Standard Japanese)コース」と「目的別・技能別(Japanese for Specific Purposes)コース」の2つに分け、日本文化体験指向の若い学部短期留学生と、大学院受験を目指す比較的年齢の高いアカデミック指向の研究留学生の両方のニーズに対応できるように工夫した。

「一般日本語コース」の方は、基礎的な文法知識を与えながら、大学生活における日常的な会話、聞き取りなど、口頭日本語運用能力をつけることを主な目的とする。「目的別・技能別コース」の方は、研究に必要なアカデミックな日本語運用力をつけることを目的とする「アカデミック日本語」クラスのシリーズと、日本文化一般に対する理解を深めながら日本語の技能をブラッシュアップする多目的クラスのシリーズとに大きく方向を分け、学生のニーズ動向を見ながら、できるだけ多くの up-to date なトピックによる日本語クラスを提供することを目指すこととした。

初級レベルでは、どのようなニーズの学生にとっても必要な基礎力を養成するために、「一般日本語コース」を実施するが、中・上級レベルにおいては、多種多様なニーズ(国費留学生、短期留学生、日韓理工系学部留学生、日研生、学部正規生、大学院正規生という身分や年齢、レベル、専門分野などによる必要な日本語の違い、入試の要不要や受講可能な時期など)が存在するため、それらにきめ細かく対応できるように、できるだけ多種多様な技能別・目的別のクラスを開設する。ただし、原則として受講者が5名以上集まらない学期には実施しないこととし、経営の合理化も図ることにした。以下に、2004(平成16)年度に開設された目的別・技能別クラスの一覧表を示す。

表7 2004(平成16)年度留学生センターの目的別・技能別クラス一覧

コース名	クラス名	開設学期	レベル	内 容	時 間 数
アカデミック 日 本 語 コ ー ス	アカデミック漢字 AK 4-a	1,2,3 学期	4	理工系の漢字・漢字語彙	週1コマ×10週
	アカデミック漢字 AK 4-b	1,2,3 学期	4	人文社会系の漢字・漢字語彙	週1コマ×10週
	アカデミック漢字 AK 4-c	1,2,3 学期	4	日本事情の漢字・漢字語彙	週1コマ×10週
	アカデミック日本語 A 5-a	1 学期	5	事実の記述・説明	週1コマ×10週
	アカデミック日本語 A 5-b	2 学期	5	事実・意見を述べる	週1コマ×10週
	アカデミック日本語 A 5-c	3 学期	5	引用・意見を述べる	週1コマ×10週
	アカデミック日本語 A 5-d	1,2,3 学期	5	調査・報告する	週1コマ×10週
	アカデミック日本語 A 5-e	1,2,3 学期	5	インタビューする	週1コマ×10週
	アカデミック日本語 A 5-f	2 学期	5	説明する・質問する	週1コマ×10週
	日本語作文Ⅰ AW 5-a	1 学期	5	日本語作文ⅠA	週1コマ×10週
	日本語作文Ⅰ AW 5-b	2 学期	5	日本語作文ⅠB	週1コマ×10週
	日本語作文Ⅰ AW 5-c	3 学期	5	日本語作文ⅠC	週1コマ×10週
	日本語演習Ⅰ A 6-a	1 学期	6	日本語演習ⅠA	週1コマ×10週
	日本語演習Ⅰ A 6-b	2 学期	6	日本語演習ⅠB	週1コマ×10週
	日本語演習Ⅰ A 6-c	3 学期	6	日本語演習ⅠC	週1コマ×10週
	日本語演習Ⅱ A 6-d	1 学期	6	日本語演習ⅡA	週1コマ×10週
	日本語演習Ⅱ A 6-e	2 学期	6	日本語演習ⅡB	週1コマ×10週
	日本語演習Ⅱ A 6-f	3 学期	6	日本語演習ⅡC	週1コマ×10週
	日本語作文Ⅱ AW 6-a	1 学期	6	日本語演習ⅡA	週1コマ×10週
	日本語作文Ⅱ AW 6-b	2 学期	6	日本語演習ⅡB	週1コマ×10週
日本語作文Ⅱ AW 6-c	3 学期	6	日本語演習ⅡC	週1コマ×10週	

日本語教育の多目的化およびモジュール化

コース名	クラス名	開設学期	レベル	内 容	時 間 数
技 能 別 目 的 別 日 本 語 コ ー ス	韓国語と日本語文法 G 4 - a	1,2,3 学期	4	韓国学習者向け文法	週1コマ×10週
	中上級文法 G 5 - a	1 学期	5	原因理由・目的・条件	週1コマ×10週
	中上級文法 G 5 - b	2 学期	5	逆接・名詞修飾	週1コマ×10週
	中上級文法 G 5 - c	3 学期	5	入れ子文・気持ちを表す助詞	週1コマ×10週
	中上級文法 G 5 - d	1 学期	5	考え述べ・文への組立て	週1コマ×10週
	中上級文法 G 5 - e	2 学期	5	る/た/ている/受身使役	週1コマ×10週
	中上級文法 G 5 - f	3 学期	5	他者/話者書き言葉/話し言葉	週1コマ×10週
	上級文法 G 6 - a	1 学期	6	助詞相当句の用法	週1コマ×10週
	上級文法 G 6 - b	2 学期	6	助詞相当句の用法	週1コマ×10週
	上級文法 G 6 - c	3 学期	6	助詞相当句の用法	週1コマ×10週
	上級文法 G 6 - d	1,2,3 学期	6	上級認知文法	週1コマ×10週
	JSP コース	外来語と読解 R 4 - a	1,3 学期	4	カタカナ語の読解
エッセイの読解 R 4 - b		1,2,3 学期	4	エッセイを読み、話し合う	週1コマ×10週
新聞の読解 R 4 - c		1,2,3 学期	4	雑誌記事を読む	週1コマ×10週
随筆の読解 R 4 - d		1,3 学期	4	随筆を読み、感想を書く	週1コマ×10週
小説・詩の読解 R 5 - a		2,3 学期	5	小説・詩を読む	週1コマ×10週
小説の読解 R 5 - b		2 学期	5	小説を読む	週1コマ×10週
説明文の読解 R 5 - c		1,2,3 学期	5	小説を読む	週1コマ×10週
要約文を書く W 4 - a	2 学期	4	文章を読み、要約する	週1コマ×10週	
400 字作文 W 4 - b	2,3 学期	4	400 字程度の論理的文章を書く	週1コマ×10週	
大学生活の作文 W 5 - a	1,2,3 学期	5	メールや通知などの文章を書く	週1コマ×10週	
O コース	聴解技能練習 O 4 - a	1,3 学期	4	聴解のための技能練習	週1コマ×10週
	TV ドラマの聴解 O 4 - b	1,3 学期	4	TV ドラマを見て感想を話す	週1コマ×10週
	TV アニメの聴解 O 4 - c	1,3 学期	4	TV アニメを見て感想を話す	週1コマ×10週
	TV ドラマの聴解 O 4 - d	2 学期	4	TV ドラマを見て感想を書く	週1コマ×10週
	TV 映画の聴解 O 4 - e	2 学期	4	TV 映画を見て感想を話す	週1コマ×10週
	大学生活の会話 O 4 - f	1,2,3 学期	4	日常場面の会話を練習する	週1コマ×10週
	話を伝える O 4 - g	1,2,3 学期	4	まとまった話を伝える練習	週1コマ×10週
	日本の歌 O 4 - h	1,2,3 学期	4	歌の歌詞から文法を見る	週1コマ×10週
	日常会話の聴解 O 5 - a	2 学期	5	日常会話の聴解	週1コマ×10週
	日本の話芸を聞く O 5 - b	1 学期	5	落語やことば遊びを聞く	週1コマ×10週
	ニュースを聞く O 5 - c	2 学期	5	様々なジャンルのニュースを聞く	週1コマ×10週
	ニュースを聞く O 5 - d	3 学期	5	様々なジャンルのニュースを聞く	週1コマ×10週
	ドラマを作る O 5 - e	2 学期	5	ラジオドラマを作る	週1コマ×10週
	TV ドラマの聴解 O 5 - f	2,3 学期	5	TV ドラマを見て話す	週1コマ×10週

※ クラス名の後ろにつけてある記号は、レベルと技能を表わす。4, 5, 6 の数字はレベル、アルファベットは技能である。A=(Academic) アカデミック日本語、G=(Grammar) 文法、R=(Reading) 読解、W=(Writing) 作文、O=(Oral Performance)聴解会話など口頭能力に関わる技能、となっている。

4. 評価と今後の課題

2004年度のコース・カリキュラムの再編によって、補講の初級レベルの各コースにおいては、週当たりのコマ数を減らしてモジュール化した結果、以前の初級レベルのコースに比べて、より多くの留学生が受講できるようになり、さらにクラスへの定着率も上がっていることなどが、1学期・2学期の登録データの延べ人数が増えていることから窺える。

中・上級レベルにおいても、受講科目が1つでも登録できるようにし、それまで必修とされていた文法科目を選択科目としたことによって、専門の授業等で多忙な学生にも履修しやすくなったと思われる。開設された目的別・技能別クラスの中で、今年度、受講生が集まらずに開講されなかった科目は、実際には2科目のみであった。人気のあるクラスには、授業初日に何十名もの学生が殺到し、抽選で受講生を決めるという事態も起こった。どのような科目に人気が集まり、受講生たちの興味・関心およびニーズがどこにあるのか、さらなる調査、検討が必要であるが、1学期、2学期の終了時に行った授業評価アンケートの結果から、今回のカリキュラム改編はおおむねよい評価を得ていることがわかった。

一方、国費留学生のための予備教育を行っている集中・半集中コースに関する評価は、その学生たちが大学院入試を無事に突破し、さらに入學後どのような成果を上げるかにかかっているため、今しばらくの時間が必要であろうが、さらなる改善のための努力を続けていきたい。

このように、目的別・技能別の中上級の日本語科目を1学期完結（1単位）の形で開講することによって、将来的には学部や大学院に入学した正規生が日本語力の不足を補うためにこれらの科目を履修し、外国語科目の単位に振り替えることが可能になるのではないかと期待している。大学内における留学生センターの役割を大きくしていくことに加えて、法人化後は、外部資金の導入、地域社会への授業提供ができるシステム作りを目指すためにも、このような形態は有効であると考えられる。

今後の課題としては、技能別・目的別クラスのレベル間での内容の調整および教材の整備が急務である。また、学生たちに履修科目を選択させるための情報を十分に提供する必要もある。具体的には、学生が自分のレベル・ニーズを客観的にかつより正確に把握できるようにするための診断システム（テストング・システム）を整備し、いつでもコンピュータ上でテストが受けられる体制を整えることが望ましい。その診断結果に基づいて、学生が履修可能な、あるいは履修するべきクラス・コースの情報を提供することができれば、留学生の日本語力を来日前に判断することもできるようになり、より優秀な留学生の大学への渡日前受け入れにも寄与することになる。

最後に、将来の展望について述べたい。現在留学生センターには、韓国京畿道の教育

庁外国語教育研修院から、高校で日本語を教えている現職教師の再研修プログラム提供の依頼が来ており、また北アフリカセンターで進行中のプロジェクトとの関連でチュニジアから受け入れる予定の研究者に対する日本語プログラムの立案の要請などもある。将来に向けて新たなニーズがまた生まれつつあると言えよう。今後の留学生センターの日本語教育部門の仕事としては、大学に在籍する外国人留学生に効果的な日本語教育を提供することにとどまらず、そのような教育プログラム作りの経験やノウハウを活かして、人材の養成、教材の開発、ラスト・評価システムの開発、遠隔教育用の e-ラーニング・システムの構築、コンテンツの整備などに関わる研究成果を、広く世界に発信していく役割が求められていると思われる。世界中に存在する日本語教育に対するニーズに応えるため、また大学における新たな役割を担うため、新しい時代の日本語教育に如何に資するかという課題と積極的に取り組んでいかなければならない。

注

- (1) 筑波大学においては、文部省からの短期留学生受け入れの要請に際して、学長、副学長を中心に企画調整室長、留学生センター長など十数名からなる国際交流委員会のもとに、国際交流に関して直面する諸問題を整理・検討するためのワーキンググループを置き、どのような体制で受け入れるかの検討を行った。当初、英語による日本文化理解や専門科目の履修等を短期留学生の主なニーズと考えたため、すでに英語による専門科目の提供を行っていた国際総合学類および日本文化関係の科目を持つ人間学類等の教育組織をその受け入れ母体として準備が進められ、英語で 30 単位程度の科目履修が可能になるようなカリキュラムが考えられた。そして、日本語科目の履修を希望する者がいた場合に限り、留学生センターの日本語補講クラスを受講させ、単位は人間学類から出すという方式を決めた。
- (2) 『「宿舎を中心とする短期交換留学生の受け入れ環境改善のためのアンケート及び聞き取り調査」に関する調査報告』という報告書が 1996 年 3 月に出されている。
- (3) ここでいう「アカデミックな日本語能力」とは、いわゆる「専門日本語」の能力をさすのではないことに注意されたい。大学生活を送る上で必要とされるコミュニケーション能力全般を指し、特定の専門分野の語彙・表現などより、講義を聴く、ノートを取る、質問する、意見を述べる、口頭発表する、レポートを書くなどといった、どの分野でも必要とされる勉学・研究に必要な日本語力を指す。

参考文献

堀口純子（1986）「筑波大学における日本語教育その十年」『筑波大学留学生教育センター日本語論集』第1号，89-109

許明子・西村よしみ・小林典子・酒井たか子（2004）「筑波大学日韓共同理工系学部 留学生事業」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』第19号，73-87